

清姫は、しばらくの間・・・そんな風に、布団に入ったまま、うつうつとした日々を送っていたが・・・やがて、起き出してきて、前のように、中辺路を歩く巡礼者達の世話をすすんでするようになった。

けれど、以前とは、ずいぶん、雰囲気が変わっている。

前のように。郷の子ども達とはしゃいで遊ばなくなった。

夜中に、川で身体を淨めている事はあるようだが・・・昼間、水遊びをしている姿は見られない。

おとなしげな・・・どこか寂しげな少女になった。

清重は、なんだか・・・屋敷の中が、火が消えたようであつまらなく、そして寂しく思っている。

ハツは、大人になったのですよ・・・と笑っている。

郷の者たちは、清姫が、急に美しくなった・・・と噂している。

すれちがうたびに・・・思わず息を飲み・・・振り返ってしまう・・・。

どこが・・・どう変わったと・・・具体的に説明できるわけではないが・・・しかし、髪や皮膚が、柔らかく・・・青い滑りを帯び・・・清姫が吐息をつけば、そこから、甘い香りが匂い立つようだ・・・。

そして、以前より、さらにやさしく、巡礼の僧や乞食・・・障害者達に接している・・・。

旅の男達は、ただ、ぼーっと見とれ・・・世話をされるのを喜んでいる・・・。

まるで、本物の観音様のような・・・と両手をあわせる・・・。

清姫は、そうして、巡礼者達の世話をしながら・・・巡礼者が、熊野坐神社からの帰りの者である事を知ると・・・必ず・・・若い背の高い僧を見ませんでしたか？と聞いた・・・。

清姫は、安珍の帰りを待っている・・・。